

# 日本健康心理学会メールマガジン No.23



2014年6月21日 第23号

## Contents

- 1) 学会からのお知らせ
- 2) 健康心理学コラムvol.18 早稲田大学人間科学学術院 山蔦圭輔先生

### 1) 学会からのお知らせ <http://jahp.wdc-jp.com/>

■学会パンフレットが完成しました  
PDFファイルとして本メールマガジンに添付いたしますので  
ご関心のある方に本学会についてご紹介頂く際にご使用くだ  
さい。

■大会準備委員会より  
第27回大会の宿泊・交通案内が更新されました  
準備委員会では、大会会場（OIST）より最も近く懇親会等も  
開催されるリゾートパークホテル谷茶ベイを  
お得なお値段でご用意しました（6,500円～）。締め切りは6/  
30(月)です。  
<http://jahp.wdc-jp.com/conf/27th/access.html>

■英論文募集について（英文翻訳助成金）  
編集委員会では、昨年度より引き続き、機関誌「健康心理学  
研究」掲載される英論文に英文翻訳助成金を支給することに  
なりました。詳しくは学会ホームページをご覧ください。（6  
月13日）

■「研究・実践活動奨励賞」  
学会では、学会員の研究・実践活動を奨励するため「研究・  
実践活動奨励賞」を設けています。  
本年度も募集を開始します。（6月2日）  
[http://jahp.wdc-jp.com/pdf/20140601\\_1.doc](http://jahp.wdc-jp.com/pdf/20140601_1.doc)

■UPM, 日本行動医学会への参加が健康心理士研修ポイント  
にUPM第27回大会（9月7日、日本大学）での研修、および  
<http://www.jupm.jp/assembly/index.html>  
日本行動医学会（11月22-23日、早稲田大学）でのシンポジ  
ウム参加は、  
<https://sites.google.com/site/jcbm2014/top-page>  
健康心理士の研修ポイントになります。（5月23日）

■研究推進委員会より  
研究部会制度に基づく活動助成の募集を2014年度も行います  
新規の申請ならびに継続の申請を受け付けます。締め切りは  
2014年6月20日です。（5月20日）  
<http://jahp-research.blogspot.jp/2014/05/2014.html>

■国際委員会より  
ヤングヘルスサイコロジスト賞の受賞者が決定しました（6月  
10日）  
<http://jahp-international.blogspot.jp/2014/06/blog-post.html>

■理事会・社員総会のご報告  
6月1日に理事会・社員総会を国際文献社高田馬場会議室にて  
開催し、2013年度事業報告と決算が承認されました。

また、理事会において2014年度の修正予算案について諮られ、  
承認されたのち、社員総会にて報告がなされました。  
なお、詳細については近日中にHPに掲載する予定です。

### 2) 健康心理学コラムvol.17 「幼少期の食行動の問題は、現在の食行動の問題に関連する か？」 （早稲田大学人間科学学術院 山蔦 圭輔 先生）

日々、心身ともに健康的な生活を送る上で、健康的な食行動を送るこ  
とは欠かすことができません。

現代社会において、食行動の問題（たとえば、摂食障害や摂食障害発  
症のハイリスク群が呈する食行動異常など）を早期に発見し早期に支  
援する体制を整えるとともに、発現予防に奏功するアプローチ法の開  
発が望まれます。

こうした中、女子大学生に対しレトロスペクティブな研究を行った結  
果、注目すべき結果が示されました（山蔦他、2014）。ここでは、  
「食事制限をいつ開始したか（小学校・中学校・高校など発達の間  
分）」を尋ねるとともに、その時点での食行動の特徴（非機能的ダイ  
エット・ストレス食い・食事へのとらわれ）を尋ねています。

その結果、小学生時点で食事制限の経験があると回答した対象者の場  
合、小学生時点の「ストレス食い（ストレス対処行動としてのむちゃ  
食いなど）」と、現在の「ストレス食い」、「非機能的ダイエット」、  
「食事へのとらわれ」とがそれぞれ有意に関連することが示されまし  
た。

また、中学生・高校生時点で食事制限を開始した場合、その時点での  
食行動の特徴は、現在の食行動の特徴と全て有意に関連することが示  
されました。

このことから、児童期にストレス対処行動として、ストレス食いのよ  
うなemotional eatingを体験する場合、その経験が将来的な食行動  
の問題と関係する可能性が推測できます。

更に検討する必要がありますが、食行動をターゲットとした支援を行  
う場合、食行動が「食べること」だけが目的となる行動ではなく「感  
情面と密接に関連すること」を重視した支援を行う必要があるといえ  
ます。

【出典】  
山蔦圭輔・笹川智子・佐藤寛・山本隆一郎・野村忍（2014）発達過  
程における食行動異常  
：児童思春期時期の食行動異常と現在の食行動異常との関連性。第43  
回女性心身症医学会学術集会（採択）

日本健康心理学会広報委員会  
<http://jahp-public.blogspot.jp/>

メールマガジンの配信停止、アドレス変更については下記アドレスま  
で。  
日本健康心理学会事務局 <jahp-post@bunken.co.jp>

メールマガジンへのご意見・ご感想については下記アドレスまで。  
広報委員会 <jahp-ML@bunken.co.jp>

過去のメールマガジンは、こちらからご覧いただけます  
<http://jahp.wdc-jp.com/health/health1.html>